

## 国語 その一（八枚のうち）

次の文章を読んであとの質問に答えなさい。

（注）久助君は、愛知県半田市の岩滑という田舎町に住む小学五年生です。ある日、その小学校に横浜から太郎左衛門君という転校生がやってきました。田舎の小学校のなかで、都会風の太郎左衛門君は皆の目を引き、久助君にとっても、洗練された身なりと美しい顔立ちから気になる存在でした。

だんだん太郎左衛門は、みんなと親しくなってきた。みんなは最初のうち太郎左衛門を尊敬して、すこしいにくかったけれど「太郎君」と呼んでいた。

やがて太郎左衛門はみんなといっそう親しくなかって、みんなに取囲まれ、酔っぱらいのように下品にしゃべり散らしていることもあった。するとみんなは、太郎左衛門を尊敬したりするのはふさわしくないことがわかり、遠慮なく「太郎左衛門」と呼ぶようになった。

そのうちにみんなはもう「太郎君」とも「太郎左衛門」ともいわなくなってしまう。というのは、太郎左衛門はつきあってもいっそう面白くない、つまらない奴だということが、みんなに分ってしまったからである。

はじめから今に至るまで、「太郎君」という礼儀正しい呼び方を続けている人がただ一人あった。それは受持の山口先生である。

太郎左衛門が嘘を吐くという噂が立ちはじめたのはその頃であった。「あんな奴のいうことは何にも信用できない。」という者もあった。久助君はそんなこともあるまいと思った。しかし或いはそうなのかも知れんとも思った。

或る日、兵太郎君が五六人の仲間に向かって、何かいっしょうけんめいに憤慨していた。久助君が何だろうと思って聞きにゆくと、こうだった。

兵太郎君が太郎左衛門に①「いっばい喰わされた」というのである。午ヶ池の南の山の中に深くえぐれた谷間がある。両側の崖がちょうど屏風を二枚むかいあわせて立てたようになっていいる。太郎左衛門は、そういう処ならとても面白いことができるかと兵太郎君にいったのだそうである。つまり、片一方の崖の上から向こうの崖に向かって、「おーい。」と一声呼びかけると、それがこだまになってこちらへ帰ってくる。そしてこちらの崖にぶつかるや、またこだまになって向こうの崖にかえってゆく。向こうにぶつかってまた帰ってくる。こちらにぶつかってまた向こうへゆく。そうしていつまでもそのひとつの「おーい」は消えないのだという。或る科学の雑誌に書いてあったからほんとうだと太郎左衛門は証まで立てたのだそう。それならほんとうだろうと思って、兵太郎君は、昨日午ヶ池へ釣りにいったついでに、例のところまで行って試してみたのである。そして太郎左衛門の言葉が「うッそ」であることがわかったというのであった。

これじゃ確かに太郎左衛門は嘘吐きであると久助君は思った。

また或るときこんなことがあったそうである。雨をともなった烈しい雷が頭の上をすぎていったあと、太郎左衛門が新一郎君に「今雲の中から雲雀が一羽、雷にうたれて向こうに落ちたから見にゆこう。きつと牛市場のあたりに落ちている。」と声はずませせていった。新一郎君はまさか嘘とは思わなかったので、

受験番号

14

中

## 国語 その二（八枚のうち）

ついでに濡れている牛市場の草をふみわけふみわけ、隅から隅まで探したが、牛の糞しか落ちてなかったそうである。これも太郎左衛門の嘘であったわけだ。

太郎左衛門が学校へ、土瓶の蓋ぐらいの大きさの、円い変なものを持って来て、

「これね、とつても面白いんだよ。」

といった。

みんなは、太郎左衛門が嘘吐きであることは承知していたが、いつでもそれを警戒しているわけにはいかなかった。殊に、こんなぐあいに珍らしい物を持って来たときには、つい好奇心のため油断してしまうのである。

太郎左衛門の説明によれば、その円いものは象牙で出来ていて、\*支那人が横浜で売っていたのだそうである。そいつを耳にうまいぐあいにあてていると、音楽が聞ける仕掛になつていふのである。

まず森医院の徳一君から始めて、みんなはそれを順番に耳にあてがってきいた。みんなが、聴診器を耳にしている医者のように、慎重な面持ちでできていると、太郎左衛門は、

「ね、聞えるだろう。\*マンドリンみたいな音が。あれ、支那の琴なんだって。」

といった。すると「う、うん。」と生返事をする者もあった。「うん、ちいせい音だなあ。」といった、にっこりする者もあった。「聞えやしんげや。」と生返事をする者もあつた。二三次振つてまたあてがってみる者もあった。

「また太郎左衛門の嘘だア。」

と太郎左衛門がいるのにそういった者があつた。それは兵太郎君であつた。しかしこの場合みんなはむしろ兵太郎君を信じなかつた。というのは、兵太郎君は十日程前から、片方の耳が耳だれでいやな臭いのする緑色の膿をだらりと垂らしていたので、みんなが例の音楽の道具を貸そうとしなかつたため、くやしがつていたからである。

久助君の番が来た。受取つて見ると黄色なつるつるの美しい象牙である。土瓶の蓋のように一方が凹んでいる。そして凹んだところの真中に小さいへそみたいなものがとび出ている。そのへそをうまく耳の穴にはめこんで聞くのだそうである。

「うーう」と\*モートルの唸つているみたいな音がはじめ聞えた。その「うーう」の中に、マンドリンの音がまじつてやしないかと、一心不乱に聴いていると、なるほど微かに、ピンピンペンペンというような音が聞える。聞えるような気がする。

「うん、聞える聞える。」

と久助君はいつて次の者に渡したのであつた。

それから間もなく、明日は春の遠足という日に、久助君はジンヤクを探すため、茶箆の抽出しをみなひっぱり出して、いろんなガラクタの中をかきまわしていた。すると中から、太郎左衛門が持っていたのと同じ象牙の円い道具が出て来た。

「うちにもこれがあつたんだなア。」

といつてお父さんにきいて見ると、それはいぜん煙草をのむ人が持っていた火皿というものだそうである。その皿の上にまだ火のついてる吸殻をのせておき、次の煙草に吸いつけるための道具なのだそうである。

受験番号

14

中

## 国語 その三（八枚のうち）

「それでも、ここにこんなへそみたいなものがあるのはどういう訳だん？」

と久助君はあまりのばかばかしさに少し腹を立てていった。そのへそには小さい穴があつて、そこに紐をとおしたにすぎないとお父さんは教えてくれたので、もう久助君は何もいうことがなかった。まんまと太郎左衛門にいつぱい喰わされたのである。

それにしてもなぜ太郎左衛門はあんな嘘を吐くのだろう。何という訳の分らぬやつだろう。

翌日久助君は、教室の窓にもたれてぼんやりしている嘘吐きの太郎左衛門の顔を、彼に気づかれぬよう、こちらのひとかげから、まじまじと眺めていた。そしてさらに奇妙なことを発見したのである。

それは太郎左衛門の眼は、左右、大きさが違うということである。右の眼は大きい。左は小さい。そしてその上おかしいことに、大きい眼は美しいなごやかな、天真爛漫な心をぞかせているのに、小さい眼は陰険でひねくれている、\*狡猾なまたたきをするのである。

こいつは変だと、久助君がいつしようにけんめい見ていると、さらに、耳も左右大きさと形が違い、鼻でさえも、左の小鼻と右の小鼻は違っているの、少しゆがんで見えることがわかった。

久助君は考えた。——太郎左衛門は一人の人間じゃなくて、二人の人間が半分ずつ寄りあつて出来ているのじゃあるまいか。いぜん、久助君は、粘土で人形をセイゾウするのを見たことがある。まず二つの型によつて、人形は半分ずつ作られ、それから二つの半分がうまく合わさつて、一つの人形になるのである。神様が我々人間をつくり出すのもあれと同じ方法するのだろう。そして太郎左衛門は何かの間違いで、大ききの違う、うまく合わない半分ずつが合わさつて出来たのかも知れない。だから太郎左衛門の中には二人の人間がはいつているのだ。

——それなら、太郎左衛門が平気で嘘をいったり、何を考えているのか訳が分からなかったりするの、当然のことだ、と久助君は思った。

遂に、みんなが太郎左衛門の嘘のため、ひどい目に合わされるときが来た。それは五月のすえのよく晴れた日曜日の午後のことであつた。

何しろ場合が悪かつた。みんなが——というのは、徳一君、加市君、兵太郎君、久助君の四人だが——退屈で困っていたときなのだ。

表畠は黄色になりかけ、遠くから蛙の聲が村の中まで流れていた。道は紙のように白く光をハンシヤし、人はめつたに通らなかつた。

みんなはこの世があまり平凡なのにうんざりしていた。どうしてここには、小説の中のように出来事が起らないのだろうか。

久助君達は何か冒険みたいなことがしたいのであつた。或いは英雄のような行為をして、人々に強烈な感動をあたえたいのであつた。たとえば、今その道の角を某国のスパイが機密文書を、免状のように巻いて手に持って現れたとしたら、どんなにすばらしいだろう。

「スパイ待て！」と叫びながら、みんな何処までも追つてゆくだろう。たといその時スパイがピストルをぶっ放して、こちらが道の上にはびつたり倒れるとしても、ちつともかまやしないのだ。

そう思っているところへ、その道角から太郎左衛門がひよっこり姿をあらわしたのである。そして彼は

14	受験番号
中	

## 国語 その四（八枚のうち）

まっすぐみんなのところへ来ると、眼を輝かせていった。

「みんな知っている？ 何か僕等が献金してできた愛国号がね、新舞子の海岸に今来ていて、宙返りやなんか、いろいろな曲芸をして見せるんだって。」

何か出来事があればいいと思っていたやさきだから、みんなは太郎左衛門の言葉だったけれどすぐ信じてしまった。そしてまた、これはまんざら嘘でもなさそうだった。みんなが二銭ずつ献金をしたことはほんとうだし、新舞子の海岸には、その愛国号ではないにしても、よく飛行機が来ていることは、夏、海水浴にいった者なら誰でも知っているからである。

見に行こう、ということにいつペンド話が始まった。新舞子といえば、知多半島のあちら側の海岸なので、峠を一つ越してゆく道はかなり遠い。十二三軒はあるだろう。しかしみんなの体の中には、力がうずうずしていた。道は遠ければ遠いほどよかったのだ。

太郎左衛門も加えて一行はすぐその場から出発した。家へそのことを云って来ようなどと思うものは一人もなかった。何しろ体は燕のように軽かった。燕のように飛んでいつて燕のように飛んで帰れると思っていたのである。

跳んだり、駈けたり、或いは「帰りがくたびれるぞ。」などと賢くお互いをお互いを制しあつてしばらくは正常歩で歩いたりして、進んで行った。

野にはあざやかな緑の上に、白い野薔薇の花が咲いていた。そこを通ると蜜蜂の翅音がしていた。白っぽい松の芽が、匂うばかり揃い伸びているのも見て行った。

半田池をすぎ、長い峠道をのぼりつくした頃から、みんなは沈黙がちになって来た。そしてもし誰かがしゃべっていると、それがうるさくて腹立たしくなるのであった。知らないうちに、みんなの体に疲れがひそみこんだのだ。

だんだん、みんなは疲れのため頭の働きがぶって来た。そしてあたりの光が弱ったような気がした。じっさい、日もだいぶん西にかたむいていたのだが。それでも、もうひきかえそうという者は誰もなかった。まるで命令を受けている者のように先へ進んで行った。

そして大野の町をすぎ、めざす新舞子の海岸についたのは、まさに太陽が西の海に没しようとしている日暮であった。

五人はくたびれて、醜くなって、海岸に脚をなげだした。そしてぼんやり海の方を見ていた。愛国号はいなかった。また太郎左衛門の嘘だった！

しかしみんなは、もう嘘であろうが嘘でなからうが、そんなことは問題ではなかった。たとい愛国号がそこにいたとしても、みんなはもう見ようとしなかったろう。

疲れのためにぶってしまったみんなの頭の中に、ただ一つこういう念があった。——「とんだことになつてしまった。これからどうして帰るのか。」

くたくたになつて一歩も動けなくなつて、はじめて、こう気づくのは、分別が足りないやり方である。自分達が、まだ分別の足りない子供であることを、みんなはしみじみ感じた。

とつぜん「わッ」と誰か泣き出した。森医院の徳一君である。腕白者で喧嘩の強い徳一君がまっさきに泣出したのだ。するとそのまねをするように兵太郎君が「わッ」と同じ調子で泣出した。久助君もその泣

## 国語 その五（八枚のうち）

声をきいていると泣きたくなって来たので、「うふうふン」と変な泣出し方だったが、はじめた。つづいて加市君がひゅつと息を吸いこんで「ふえーん」とうまく泣出した。

みんなは声を揃えて泣いた。するとみんなは自分達の泣声の大きいのにびっくりして、自分達はとりかえしのつかぬことをしてしまつたと、あらためて痛切に感じるのであつた。

そして四人はしばらく泣いていたが、太郎左衛門は、ヒロった貝殻で足下の砂の上に條をひいているばかりで、泣出さないのであつた。

泣いていない人のそばで泣いているのは、ぐあいの悪いものである。久助君は泣きながら、ちよいちよい太郎左衛門の方を見て、太郎左衛門もいっしょに泣けばよいのに、と思つた。こいつは何という変な、訳のわからんやつだろう、とまたいつもの感を深くしたのである。

陽がまったく没して、世界は青くなつた。最初に久助君の涙が切れたので泣きやんだ。すると加市君、兵太郎君、徳一君という、泣出しとは逆の順で、蟬が鳴きやむように泣きやんでいった。

その時太郎左衛門がこういった。

「僕の親戚が大野にあるからね、そこへゆこう。そして電車で送ってもらおう。」

どんな小さな希望にでもすがりつきたい時だったので、みんなはすぐ起ちあがつた。しかしそれをいったのが、ほかならぬ太郎左衛門であることを思うと、みんなはまた力がぬけるのを覚えたのである。もしこれが、誰かほかの者がいつたなら、どんなにみんなは勇気をふるい起したことだろう。

やがて、大野の町にはいつたとき、みんなは不安でたまらなくなつたので、

「ほんつけ、太郎左衛門？」

と何度もきいた。その度に太郎左衛門は、ほんとうだよ、と答えるのであつた。が、いくらそんな答えを得てもみんなは信じることはできなかった。

久助君も太郎左衛門をもはや信じなかつた。——こいつは訳のわからぬやつなのだ、みんなとは物の考え方がまるで違う、別の人間なのだ、と思ひながら、みんなに立ちまじっている太郎左衛門の横顔をするどく見ていた。すると、太郎左衛門の横顔は、そっくり狐のように見えるのであつた。

町の中央あたりまで来ると太郎左衛門は、「ううんと、ここだったけな。」などと一人ごとしながら、あつちの細道をのぞいたり、こつちの露地にはいつたりした。それを見るとほかの四人はますます頼りなさを感じはじめた。また太郎左衛門の嘘なのだ。いよいよ絶望なのだ。

しかし間もなく太郎左衛門は、ひとつの露地から駈出して来ると、

「見つかつたから、来いよ、来いよ。」

とみんなを招いたのである。

みんなの顔に、暗くてよくは見えなくなつても、さアっと生気の流れたのがわかつた。足が棒のように疲れているのも忘れて、みんなはそっちへ走つた。

いちばんあとからついてゆきながら、久助君は、だが待てよ、と心の中でいつた。あまりウチヨウテンになると、幸福に逃げられるという気がしたからであつた。何しろ相手は太郎左衛門なのだから、真に受けることはできないはずだ。

そう考えると、またこんども嘘のように久助君には思えるのであつた。

14	受験番号
中	

## 国語 その六（八枚のうち）

そして久助君は、時計をならべた明かるい小さい店のところに来るまで、太郎左衛門をうたがっていた。しかしそこがほんとうに太郎左衛門の親戚の家だった！

太郎左衛門からわけをきいて驚いた小母さんが、

「まあ、あんた達は……まあまあ！」

とあきれてみんなを見渡したとき、久助君は救われた、と思った。するときゅうに足から力がぬけて、へたへたと鬨の上しきに坐すわってしまったのであった。

それから五人は時計屋の小父さんにつれられて、電車で岩滑いわなべまで帰って来たのであったが、電車の中では、お互いに体をすり寄せているばかりで、一言もものをいわなかった。安らかさと、疲れが、体も心も領りやうしていて、何も考えたくなく、何も言いたくなかったのである。

嘘吐うそつきの太郎左衛門も、こんどだけは嘘をいわなかった、と久助君は床にはいったときはじめて思った。死ぬか生きるかというどたんばでは、あいつも嘘をいわなかった。そうしてみれば太郎左衛門も決して訳わけのわからぬやつではなかったのである。

人間というものは、ふだんどんなに考え方が違っている、訳わけのわからないやつでも、最後のぎりぎりのところでは、誰も同じ考え方なのだ、つまり、人間はその根本ねもとのところではみんなよく分りあうのだ、というところが久助君には分ったのである。すると久助君はひどく安らかな心持になって、耳の底に残っている波の音をききながら、すっと眠ってしまった。

（新美南吉の文による）

（注） \* 憤慨……ひどく腹を立てること。

\* 支那……昔の中国の呼び方。

\* マンドリン……弦楽器の一種。

\* モートル……モーター。

\* 狡猾……悪賢いこと。

14	受験番号
中	

国語 その七（八枚のうち）

問一 「久助君はそんなこともあるまいと思った。しかし或いはそうなのかも知れんとも思った」とあるが、次の空欄に当てはまる漢字を入れて、久助君のこのときの気持ちを表す四字熟語を完成させなさい。

半  半

問二  内の言葉の意味として最もふさわしいものを選び、その記号を書きなさい。

① いっぱい喰わされた

(ア) ひどい目にあつた

(ウ) たくさん食べさせられた

(オ) うまくだまされた

(イ) 気まずい思いをした

(エ) 恥をかかされた

② 生返事をする

(ア) あいまいな返事をする

(ウ) しらけた返事をする

(オ) 不服そうな返事をする

(イ) 小声で返事をする

(エ) すぐに返事をする

問三 「それならほんとうだろうと思って」とは、どういうことですか。「それ」の指すことと、「ほんとうだろうと思つた」た内容がわかるように説明しなさい。

問四 「あまりのばかばかしさに少し腹を立てていった」とあるが、なぜばかばかしいと思ったのですか。

14	受験番号
中	

国語 その八（八枚のうち）

問五 「見に行こう、ということにいつぺんで話がきまった」とあるが、「いつぺんで話がきまった」のはどうしてですか。

問六 「とんだことになってしまった」とあるが、それはどういうことですか。

問七 「人間はその根本のところではみんなよく分りあうのだ、ということが久助君には分ったのである」とあるが、久助君にとって「根本のところではみんなよく分りあう」とは具体的にどういうことですか。

問八 文章中のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

	ジシヤク		
分別		セイゾウ	
	ヒロった		った
		ウチヨウテン	
		ハンシヤ	